

ワンワンビーンアログリセーション

通い慣れた建物の三階にある一隅で、目の前の人は何の気なしに話しかけてくる。

「考えてみるよ、どうしてここにいるのかもよくわからないね」

わたしときみの「とね」と念を押しながら、その人は軽く微笑む。私としては、その笑みの意味の方がよく分からなかった。

聞かたびに興味をそそられてきた問いかけ、私たちの日常を掘り進めて裏返してしまうような魅力的な問いかけは、しかし、今となっては、ただ私の胸をざわつかせたただけだった。

「この場から離れたい。」

それはこの人の言葉に答える責任を放棄したいということだけではなかった。私はこの人と同じ場所にいることが、今や苦痛なのだった。でもこの人は多分、私ほどに気負っていないだろうということも私にしては珍しくなんとなくわかっていたから、半ば機械的に、これまで道のりで学んできた言葉を、ぶしつけに並べてみた。実に覇気のない、模範解答だった。それは確かに私の経験から得た本心を写してはいたけれど、こんな形で言い表したいことじゃなかった。目の前にいる人は言葉を続ける。示し合わせたようなやり取りのあと、その人はこう言った。

「やっぱり、わたしは最終的なところで、言葉というものを信用していないんだと思う。私もそっぴたよ。」

普段ならそう言ったかもしれないが、すでに随分と疲弊していたので、私はそれらしい相槌を打つこととめた。

地上約二千米メートルの眺めも、慣れてしまえばどうということもない。というか、わざわざ見たいような景色でもない。地球と違って雲が発生しないこの場所では、遙か遠くの上稜までくつきりと見えるが、木の一本も生えていない。いついつとした藍色の岩肌を見ても面白くもなんともないのだった。むしろ、私が内側から山々を覗き見ているこの宿舎の方が、一見の価値がある巨大構造物だと思っ。

文差部分に丸みをもたせたあみだくじ。傍から一望するとそんな風に形容できるかもしれ

ない。都市機能を併せ持った馬鹿でかい「のあみだくじは」という建築原理で建てられているのかは専門家ではないのでよく分からないのだが、とにかく地面に敵めしくぶっ刺さっているのだった。

「この建物の外装は基本的に3D体でしか見る機会がない。定期便でここに来たときに、一度だけ窓から垣間見たことがあるくらいだ。インパクトは凄いけれども、地球出身の感覚からすればやはり奇妙な外観なので、「感動」という気持ちは特になかった。地球に戻ったガガーリンとは似ても似つかない感覚なのだろう」と、ふとふとでもいろいろに思考が飛んでいく。

案の定、全然集中できていなかった。

なるだけいつもの同じようなことをして落ち着くこと、部屋から持ってきた本のページを繰ってはみるものの、目が滑ってまともにも内容を追うことができないでいる。ぐいっと強めに瞬きをして、気合を入れなおす。入れた途端に、意識が別の方向に広がって散漫になる。さっきからそんなことを繰り返していた。

「ニュースというものはいつも急なものを、11月の予定なんか知った「つちやないとばかりに踏み倒していく。別に、保護者が急病になったとか、どこかの地域に野良隕石が降ってきて少なからぬ被害が出たとか、そういう種類の深刻な話ではない。さっきからどうもソワソワしてしまっているのは、もっと個別具体的に、どこでもあるような話で、「ニュースなんて強調するほどのことでもなさそうな、みみずちをつけてしまっただけの話だ。」

生活の延長上にある「せに」、私の日常を確かに揺がざっていくような話題。

ほんと「肩に柔い質量が当たる。」

振り返ると「その」123がいた。特徴的な「ニコ」笑いが今日も顔になじんでいる。服装に対するコメントは、私の美的センスからは「なに」判断を下す「こと」は難い。

「おまたせしました」

「おー、久しぶり」

気が散ったままに定型的な挨拶をする。とはいえ、意識が123に収斂していく感覚は、振り返ってからすべに芽生えていた。呼びかけ、応答、つまりは、やりとり。そういうものには、心身を強制的に引き寄せさせる磁場がある。視界「123」という対象がくっつきと浮かび上がり、その分、周囲のあれやこれやの輪郭が滲んで、一様に背景に切り替わっていく。

「何を読んでいたんですか？」

私の手に握られている書籍を指さす「123」が問いかける。

「あー、これ」

……うーん、なんと「えは」だろうか。話題のベストセラーではないし、タイトルを伝えた「123」の内容がイメージのものを「も」まなう。ジャンルで説明するなら何系だろうか。123の出身地域の言葉では確か「化学」という区分を使っていたはずだから、えーと。

「……理科系の本かな」

123 が予約を入れてくれていたフロアにはまだ来たことがなかった。地球人にやさしい料理を提供してくれる、とどうもどうもか前情報を持っていない。すっかりもの123に準備を任せてはかりなので、私はほとんどの何もしない。

ポーンと到着の音が鳴って、エレベーターのドアが開くと、開けたフロアは意外にもポップな雰囲気だった。なんというか、昔地球で通っていた雑貨店に似たようなところがある。照明が明るいと、ところか、カラフルな壁紙とか。

「じつはね」

123 が迷わず進む先には、中華料理店らしい赤と金の店構えが見えた。123 と一緒にその中に入り、四人ほど囲めそうな円席に123 と座った。テーブルの上には箸の入った筒が置いてあって、それを見た123 が嬉しそうに顔をほころばせる。

「私、お箸を使って料理を食べたことがないので、練習してきました」

123 は手持ちの派手な色をした靴から、「マイ箸」らしきものを取り出し、「これまた「マイ箸置き」らしきもの上に恭しく乗せた。準備は万端らしい。青みがかった箸置きは、なんらかの動物の形を模したものだ。いかんせん、地球外生物の種類には詳しくない。二本の触覚(ツノかもしれない)が突き出たところなんかは、アッぽい、ほら、あの。

「なんか、ウミンミンみたいな形してる」

「ウミンミンは〜」

「地球にいるウネウネした生き物」

「あ、あ」

123 が瞬時に検索実行する。123 と私の間にどこか懐かしいフォルムの海洋生命体が映し出された。どっちが前後か分かりにくい造形、赤・白・青の特徴的なまだら模様。ホトケウミンだ。

「へえ、可愛いわね」

3D 体を指さしてと動かしながら、123 は色々な角度からホトケウミンを眺めまわっていた。私の目線の先に、一瞬、その腹部が見える。まだら模様の背中とは異なり、岩肌と接する部分は、はつとすすむくらい白かった。

出身地の浅瀬で、ウネウネと目にしたはずのそれ(ら)の、意外な一面だった。水中にもぐるにせよ、水面越えて見ると、結局のついで私(ら)の一面しか見ていなかったらしい。ただ裏返しにされただけで、私の日常の一部までもが併せてめくりあげられた、ゆつやかな感覚に陥る。

ホトケウミンシは確実に、何てことのない生活の中の端役だった。出身地に対する郷愁を誘うような象徴的なものでは決してない。それは確実に、私の風景に溶けだしていたもののひとつ。ピュアなのはいつかじない夥しい要素の内のひとつだった。だからこそ、少し不思議なのだ、めくられたような感触を覚えるのは。

取るに足らないそれに、かすかにでもどきりとするなんて、フツーはないことだ。いや、実のところ、どきりとした瞬間にその理由に気付いてはいる。言葉が後追いでそれにかざわつてきている。

ほら、急なニュースのことだよ。アレだ、アレ。あいつのせいで、素通りしていたものにまづ、あんなにじじい見出しって、変な気分になっちゃってどきりやないか。何も考えていなかったことまで意識しちゃって、手足がギクシヤクするどきりやあ、ないか。

……これは個人的なことなのだが、人と話しているときに、気がそれるとイライラする。

数秒意識が外れていた隙に、私たちの前には料理が運ばれてきていた。おそらく異星人のシンエフが腕によりをかけて持えた、アレンジまみれの中華(風)料理。蒸し器の蓋の中には、およそ中華料理らしくない配色の点心があった。毒々しいまでのトコロロール。

「わ、ウミニョシみたいじゃー」

123 が嬉しそうに箸を構える。どっさり色味がついてはあまり頓着しないらしい。私はテーブル上の3D体をわき目に苦笑した。

「井、とにかく食べよう食べよう」

そこから、例に挙げた例の「ジュベ」123 と他愛ない会話を等速で続けたのだった。

結局のところ、いつもの場所が落ち着くということだ。なんだかんだと言いながらも、私は変わらないのが好きだ。そんなわけで、私たちはいつものバーに来た。123はどこからかと言いつつ新しい店を開拓して行くのが好きらしいのだけれど、一緒に出かけるときは大体私を要請に合わせてくれるのだった。地球のバーは店内が薄暗いのが常だが、こちらのバーは全体的に照明が強いし、色合いも彩度が高い。客のテンションもバーというよりは居酒屋に近い。でも居酒屋よりは騒がしくないのって、不思議な雰囲気ではある。

「だからなごめないうちもねえ」

普段は理知的な123も、アルコールが入って声が少しだけ大きくなっていた。ストーリーでグラスの氷をカシヤカシヤかき混ぜながら、123は続ける。

『なんのためにそれをやるの？』『予定してっつるスペインはどわくらっつ』『もっついでいやり方が

あるかもしれないよ』……。そんなのばっかりです！口には出さなくても暗にそう言っているのが丸分かりですよ。合理性おぼけ、目的の権化、有意味の神格化。ああ、嫌だ嫌だ」

「お、お、お」

相槌打つマシーンの私。

「つまりは、クソです」

「シツと気持ちよく中指を立てて、123はカクテルをずっと飲み干した。

「いや実に素晴らしいアジテーションだ」

おどけた拍手で、123「答える。123は含み笑いをして、私の横で身を屈める。休み時間にもいつも寝ていたクラスメイトみたいな姿勢だ。

「大分回してききました、alcohol」

「……まあ、元気になるまで呑んだらよろしく……」

「だいが元気ですよー。」「数日ぐー一番元氣」

「そりゃあ上々だ」

もう「何かつぶやまながら、123は自分の腕に顔をうつめた」。

茶化してはいたが、職場での星人関係が本人的には相当なストレスらしい。聞いている分には、星人関係というか、「」にやってくる星人たちに概して共通する独特の規範的な考えのよさなものに対するストレスを「」についても言いかもしれない。強い目的意識とかそういうものだ。そりゃあ、こんな場所にわざわざやってくる星人なぞ、少なからず同じような考えを志向しているものだが、それがそのまま「」の場所で生活する星人全てに受けられているわけでは到底ない。少なくとも、私や123にとっては「」という目的意識的なものは肌に合わないものだった。じゃあ、なんで私や123は「」に来たんだよという話ではあるのだが、私に関しては、そういう成り行きだったとか言ってもいい。あるいは、「」しかなかったと表現する「」もできる。「」な「」を「」して「」な「」は能力に秀でた一部の星人だけだ」と怒られてしまいそうだが、実際のところそうなのだ。逃げる「」にやってくる奴だっているのだ。日常の導火線に火がついて、追いつけられないようにやってくる奴だっているのだ。それまでの生活が続けられなくなっていく「」があるいは、仕方なく……。まあ、「」にやってくる「」と自体が、生活における暴発のようなものでもあるもので、逃げおぼせる「」な「」最初から「」がないのかもわからないけれど。

【はじめなかつたんですよね、昔から】

「ううだったが、123から今日と同じような話を聞いた。正直なところ、異星の文化規範については、地球人からは上手く想像できないものもあるのよ、私は123が言っている「」を何とかよく理解できなかつた。それでも、私自身もはるかに言語運用能力に秀でた123が、「お、お、お」と、何かを確かめる「」の口から「」を導き出している様子は、私自身にも思い当たる経験があったのだった。だから、私たちは「」して「」しているのだと思っ。「」や「」して、無

目的な言動に心身を遊泳させながら、時折、シームレスに悪態をついているのだと思う。改めて確認したことはなげかわい、123のちよつとだけ奥深くで流れているものと、私の中の支流が、ユリかのタイムリંગでびびりかきつ、私たちはそのまま何となく、同じ流れの中で生活している。かみユリ、ユリかみで分流するものの流れの速度は、今のユリカは等速だ。

【考えてみるユリカ、ユリカユリカいるのかもよくわかんないね】

地球にいた時にそう言われたことを、今やはっきりと思ひ出していた。あの時も、そして逃げるための「ユリカ」をよびよめてからも、私は、そこおんなじくは、123は、まだずっとよくわかんないままなのだ。

私たちは、ただ、日常の微かな振動にすら、「ユリカ」をそれれなくなったただけなのだ。それだけ耐久力がないものだから、「ユリカ」やっつ余計なことを思ひ出しているし、ホトケウミンウシにまで裏返されることになってしまっている。

「ユリカ、ユリカ」

123がむくむく起き上がる。無表情で何を考えているのかよくわからなう。

「何か嫌なことがある？」

「なにで〜」

「……んー、なんとな〜」

「お、123、ユリカはアバウトな物言いだ」

「alcoholとかは、お、お、お」

ユリカはユリカユリカユリカ。123の言ひ分だつてそうだし、私がこれから話すこともそうだ。きこかけがあるならば、別にわがやわが秘しておくこともない。変にためこむから破裂するのだ。123のガス抜きという文脈に便乗させても、ユリカユリカ。

「えー！ 元恋人が同じ職場にー」

「うーっ、なんて嬉しそうな顔をじゃがる。酒をくばっていた身体がいきなり「ちんちん」を向いて、前のめりに続きをうながしていた。

「おっおっ、見世モノじゃねえぞ」

ひょろい腕を構えてホクサーの真似などをこつてみる。

「ウツ、すみませぬ。そつとすみませぬ、本人が一番つらうと、おんなじウツ」

「もう貴様の愚痴を聞くんとはなないと思ふ」

「わー！ すみませぬ、すみませぬ……」

お互いにごぶげけ倒した後に、カクテルを口に含んで少し気持ちを落ち着かせる。

「……しかし、ネリですか。それは災難ですね」

「ひょっとしたところあるかなとは思ったけれど、ご自身が現実になるとなかなかくるものはあるね」

「追加しますか、alcoholic」

「んー、nerve」

もうだいたい酔いが回っていて視界がぼんやりしていたけれど、促されるままに注文する。いや、酔いが回っているから「その判断力が鈍っているのかも」じゃない。キョウとアツコのことだ。

最初こそおどけてはいたが、123 は事の詳細について無理に尋ねようとしていなかった。ただ、気持ち少しだけ顔をほころばせて、どこを見てもなく瞬きを繰り返していた。

何と話をうかがうと考えながらアツコの中で、頭の中を忙しく動き回っているのは、いつでも同じはずの事ばかりだ。数刻前まで読んでいた本の内容や、だらだらと続けていた会話のトピック。そういうものがアルコールと場の雰囲気と掻き混ぜられて、何ともしやえない酔酩を引き起こしていた。心地よいだけでもなく、気持ち悪いだけでもない。つぎ次第で、どちらにも弾けてしまいうような、無軌道な空気を。そういうものを123 と共有するたび、私は123 の底流に脚を浸っているような気分になった。

123 ちゃんだったのか？

何から話したのか、相変わらずさよへわからないので、またしても別の疑問が湧いてきてしまった。それもこれもあれも全部、キョウとアルコールのせいなのだった。

互いに口を噛み合いながら、私たちは通奏低音に身を任せて、まるで不似合いな日常を闊歩している。無目的なそれは、いつかは誰か、あるいは何かによって弾き飛ばされるのだろうか？

収縮と発散、連続と断絶、つまりは、ウツリナシのバーソロブレーション。

何に急かされたのかすらわからないまま、とりあえず私は123 に語り始めた。

(終)